

## 1.1 子ども観と育児方針

### —第1回～第6回「出生児縦断調査」の分析から—

元森絵里子

#### 1. 子ども観の4分類—前回報告書から

##### 1.1 出生児縦断調査における子ども観の分類

「21世紀出生児縦断調査」(以下、出生児調査)には、第3回に「平成13年1月/7月生まれのお子さんはどのような子に育てて欲しいと思いますか。次のうち、特に重視したいもの5つまでを選んでその番号に○をつけてください」(問14)という設問がある。前年度の拙稿(元森2008)では、15個の項目<sup>1</sup>から5個まで選択する形式のこの設問の、子ども観分析における可能性と限界を検討した。加えて、SPSS15.0を用いたコレスポネンシ分析によって、同設問の回答傾向から、全ケースを4つの群に分け、それぞれの属性の検討を行った。

それによれば、全ケースは、他者との協調や調整的な行動を支持する傾向と、自発的で積極的な行動を支持する傾向からなる第1軸と、知性を重視する傾向と感性を重視する傾向からなる第2軸によって、4つに分類できる。そこでは、従来の子ども観研究が明らかにした近代的な子どもへのまなざしに引きつけられ、子どもの自発性を強調するか否かは児童中心主義か伝統的な子ども観か、知性か感性かは厳格主義・学歴主義か童心主義かと整合的に解釈できるとした。

若干言葉が足りなかった部分があったので、これを再度先行研究にひきつけて言い直そう。大正期の新中間層から出現し、現代においても広く共有されている「教育家族」の子ども観について、広田照幸(1999)が、沢山美果子(1990)の議論に修正を加えながら3つの「(教育的配慮)」に関する心性を併せ持っているとして述べている。すなわち、子どもの純真さや無垢を賛美する「童心主義」、早くから厳しくしつけや道徳教育を行って規律を身につけさせようとする「厳格主義」、知識を習得させ学歴をつけさせようとする「学歴主義」である。ここで、さらに修正を加えよう。子どもの純真さや無垢さ、大人にはない子どもらしい感性などを尊重する、いわゆる「童心主義」に対して、しばしば混同されるものとして、欧米の「児童中心主義」の教育運動の影響を受けた、子どもの自発性や積極性を強調する思潮がある。後者の児童中心主義の側面は、中心的思想家であるデューイの理論が、より効率的な学習のための手段の側面を持っていたように(Dewey 1990)、「詰め込み」を

<sup>1</sup> 「思いやりのある子ども」「じょうぶなからだの子ども」「命あるものを大切にする子ども」「正直な子ども」「自分の思うことをはっきり言える子ども」「物を大切にする子ども」「感性豊かな子ども」「礼儀正しい子ども」「人の話をよく聞く子ども」「よく考えて行動する子ども」「好奇心の旺盛な子ども」「自然が好きな子ども」「正義感の強い子ども」「その他」の15項目である。

批判しながらも、よりいっそう強力に業績性へと子どもを導こうとする意図とも矛盾しない。このように考えたとき、広田の分類は、厳格主義、学歴主義、童心主義、児童中心主義の4つに書き換える。そして、この4つの類型は、出生児縦断調査から表れた4つの子ども観と整合的に解釈できるのではないだろうか。

すなわち、「調整・協調」かつ「知性」を重視する第1象限は、道徳・しつけに関する知を重視する厳格主義、「積極・自発」かつ「知性」を重視する第2象限は、子ども自身による知識の獲得を強調する学歴主義（より一般的な言い方をすれば業績主義）、「積極・自発」かつ「感性」を重視する第3象限は、何事においても子どもの自発性と感性を重視する児童中心主義、「調整・強調」かつ「感性」を重視する第4象限は、周囲に調和した子どもらしさを重視する童心主義と言い換える（図1）。

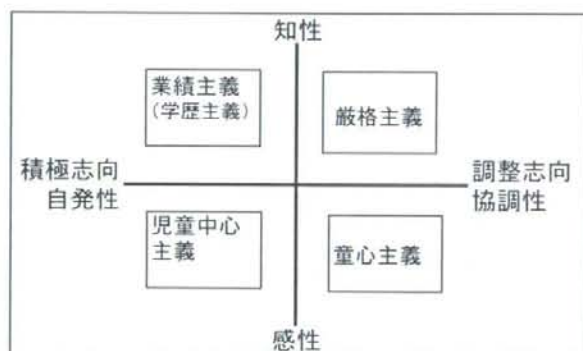


図1 「出生児縦断調査」における子ども観の4分類

## 1.2 子ども観の4分類の規定要因

なお、元森（2008）では、すでに、コレスポネンス分析の結果から、全ケースをこの4分類に分け、その規定要因を家族の属性や子ども側の要因に探っている。その結果をまとめた形で表1に再掲する。

それによると、子どもの性別と回答者が父か母かといったジェンダー要因は、調整か積極かの軸に関係している。兄姉がいるか弟妹がいるか、多胎児か否かといった子どもの出生順位も影響しており、三つ子や弟妹がいたりすると感性×調整、兄姉がいると知性重視となる<sup>2</sup>。また、子どもの成長が早いほうが積極性を志向しがちのようである。このような子どもの側の要因に加え、家族の社会的属性においても、いくつかの傾向が読み取れる。「知性×調整」型は、祖父母と同居、郡部、一戸建て、父母の職業威信が低く学歴も低いなど、一般に最も保守的と想定される層に多い分類と考えられる。それに対して、「感性×積極」

<sup>2</sup> 「おにいちゃん・おねえちゃんだから」といった配慮が働くことに加え、子ども観を漠然と聞いたとき、就学年齢の兄姉がいるとそちらに引っ張られて知性を協調するといった要因もあると考えられる。

型は、大都市、集合住宅、父母の職業威信や収入、学歴が高い、母親がフルタイムで働いているといった進歩的な層よりである。その間に当たる「知性×積極」と「感性×調整」は、前者は、父母の階層が「感性×積極」同様に高いのに加え、やや年齢が高い層、後者は、父母の学歴と年齢が低く、母親が主婦であるなどやや伝統よりの層よりの分類であると言える。

表1 子ども観4分類の規定要因

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
子どもの性別	女兒	男児		女兒
子どもの成長※		特に成長が早い	成長が早い	
兄弟	兄弟あり		兄弟なし	
弟妹				弟妹あり
多胎児か否か				三つ子
祖父母との同居	祖父母と同居			祖父母と別居
	(別居の場合、祖父母との行き来が頻繁であるほど調整志向)			
都市規模※	郡部	13大都市		
住居携帯	一戸建て	集合住宅		
母親の職業			母常勤	母主婦
父親の職種	父(母)職業威信低い	父(母)職業威信高い		
父母の収入		父母の収入高い		
父母の学歴	父母高卒以下	父母高等教育以上		父母高卒以下
父親の年齢		父40代以上		父30代
母親の年齢		母30代後半以上		母30代前半以下
回答者	母が回答	父が回答		母が回答

※印は、ロジスティック回帰分析では有意ではなかった

最も保守的な層が持つ厳格主義の「知性×調整」、学歴や業績を重視する一昔前の業績(学歴)主義の「知性×積極」、時代の最先端をいく層が持つもっとも進歩的な児童中心主義の「感性×積極」、若く小さい子どもの多い層によって担われる現代的な童心主義の「感性×調整」と分けられそうである。

### 1.3 本稿の課題

元森(2008)ではさらに、この分類を用いた分析事例として、しかり方(第4回問16「平成13年1/7月生まれのお子さんが悪いことをした場合どのように対応していますか」)に関する分析を行っている。それによれば、全体として分類ごとに大きな差異は見られないが、「知性」型、中でも「知性×調整」型は有無を言わず教え込む厳格なしかり方を採用やすく、「感性」型、中でも「感性×積極」型は子どもに理由を考えさせ、自分で判断できるようにする対話的なしかり方を採用しやすいということが明らかになった。これは、1.2で見た4分類の傾向とも親和的な結果である。

本稿では、この分析をさらに進め、出生～就学前に当たる第1回～第6回調査における、

子育てで「気をつけていること」や「意識していること」といった育児方針に関する項目の回答傾向が、4分類によってどう異なっているかを確認する。それによって、現代日本における子ども観の差異による育児方針の違いを具体的に浮かび上がらせる(2)。

加えて、第6回「お手伝いをさせていること」と、第3回調査以降一貫して設問のある「習い事」に関する傾向を確認する。対象となる子どもが小学校に入学する第7回調査以降、学習や家庭生活にまつわる家族の教育行動を、子ども観との関係も含めて見ていくことが必要となってくると考えられる。それらのつながりうる作業として、就学前のお手伝いと習い事の傾向を子ども観の4分類ごとに確認する(3)。

## 2. 子ども観と育児方針

### 2.1 育児方針の諸項目

ここで分析するのは、「子育てで意識して行っていること」(第1回問9)、「食事で気をつけていること」(第2回問4)、「おやつについて家庭で気をつけていること」(第3回問6)、「健康に関することで意識して行っていること」(第4回問13)、「遊びについて意識していること」(第5回問4)、「食事時に特に気をつけていること」(第6回問10)、の各項目である。子ども観を尋ねた第3回より前の調査の項目に関しては、第3回調査で子ども観に関する設問(問14)に答えたケースのみの分析となる。

総じて、先述の「しかり方」と同様、全体的な傾向は各分類とも共有しており、回答の全体的な傾向を覆すような大きな差異は見られない。後掲の諸図で確認できるとおり、家族は、子どもに対する配慮を様々に行っている。乳児期には「よく話しかける」(89.7%)「よくだっこする」(64.3%)などのコミュニケーションとスキンシップ、「生活リズムを崩さない」(54.1%)などの生活管理を「意識して」行い、食事では「色々な食品を食べさせる」(83.2%)、「決まった時間に食べさせる」(58.6%)、「健康や成長によくないものは食べさせない」(47.8%)など気をつける。健康面についても、「外から帰ったら手洗いをさせ」(79.6%)、「歯の仕上げ磨き」(78.7%)をする。また、食事の際には、「遊びながら食べない」(76.7%)、「あいさつをする」(72.8%)など様々なしつけを行っている。これらの項目では意識していることや気にしていることが「特にない」と答えた割合が10%以下と低く、多くの家族が何らかの配慮を子どもに対して行っていることになる。これらは、先述の近代家族研究のほか、アリエス(Aries1960=1980)、などに代表される近代子ども観の諸研究の知見を追認している。(おやつと遊びは、育児において副次的と見なされているのか、各項目の選択率が30%台以下のものが多く、「特にない」率も高い。)

しかし、選択率には一貫した差異が見られ、各分類の傾向はある。以下、詳細に見ていく。

## 2.2 子育てで意識して行っていること

第1回調査問9「子育てで意識して行っていることは何ですか」(問9)の回答傾向を子ども親の4分類ごとに見たのが表2である。項目ごとに、子ども親別の選択率に順位を透けている。また、項目ごとのクロス表で、残差の絶対値が1.97を超えるものを明示している。(これらの点に関しては、以降のすべての図も同様。)

ほぼすべての項目で選択率が高いのが、「感性×積極」であり、「特に意識して行っていることはない」の選択率も最低である。「知性×調整」は、逆にほぼすべての項目で選択率が低く、「特に意識して行っていることはない」の選択率も高い。「知識×積極」は、「特に意識して行っていることはない」の選択率が最も高い一方、「よい音楽を聞かせる」「その他」などの選択率が「感性×積極」に次いで明らかに高く、意識は高いものと見られる。総じて、積極的な子どもになってほしいと望む層のほうが、色々なことを熱心に行っているようである。

表2 子ども親と子育てで意識して行っていること

	よく話しかける	よくだっこする	よい音楽をきかせる	外気浴をさせる	子どもの生活リズムをくずさない	その他	特に意識して行っていることはない	不詳	合計
知性×調整	10,181 (3) 89.5	7,160 (4) 62.9	1,874 (4) 16.5	5,527 (4) 48.6	6,077 (4) 53.4	1,408 (4) 12.4	650 (2) 5.7	16 0.1	11,377 100.0
知性×積極	8,564 (4) 88.5	6,237 (2) 64.4	1,978 (2) 20.4	4,802 (3) 49.6	5,266 (2) 54.4	1,508 (2) 15.6	564 (1) 5.8	26 0.3	9,681 100.0
感性×積極	9,753 (1) 90.4	7,074 (1) 65.6	2,235 (1) 20.7	5,805 (1) 53.8	5,880 (1) 54.5	1,819 (1) 16.9	486 (4) 4.5	22 0.2	10,789 100.0
感性×調整	9,881 (2) 90.1	7,035 (3) 64.2	1,968 (3) 18.0	5,550 (2) 50.6	5,918 (3) 54.0	1,596 (3) 14.6	567 (3) 5.2	20 0.2	10,962 100.0
合計	38,379 89.7	27,506 64.3	8,055 18.8	21,684 50.7	23,141 54.1	6,331 14.8	2,267 5.3	84 0.2	42,809 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.3 食事で気をつけていること

第2回調査問4「食事で気をつけていることについておたずねします」の回答傾向を子ども親の4分類ごとに見たのが表3である。「意識して行っていること」ほど一貫した傾向は見られないが、やはり「感性×積極」が、「色々な種類の食品を食べさせる」「子どもの健康や成長によくないものは食べさせない」「決まった時間に食べさせる」で選択率が高く、最も気を配っている。ただし、「子どもが嫌いなものでも食べさせる」「家族が揃った中で食べさせる」は明らかに選択率が低く、食べ物の種類や内容に気を配り、時間も管理するが、古典的なしつけは他のグループよりも熱心ではないと言える。逆に、それらの2点が高いのが「知識×調整」である。この傾向は、しかり方で見た傾向とも近いだろう。「感性×調整」が選択率が高いのは、「子どもが嫌いなものでも食べさせる」「子どもの健康や成長によくないものは食べさせない」であり、しつけよりも健康志向と考えられる。

なお、「知識×積極」が熱心なのは、「子どもが欲しがるときに食べさせる」「その他」である。

表3 子ども観と食事で気をつけていること

	色々な種類の食品を食べさせる	子どもが好きなものを食べさせる	子どもが嫌いなものでも食べさせる	多くの量を食べさせる	子どもの健康や成長によくはないものは食べさせない	決まった時間に食べさせる	子どもが欲しがるときに食べさせる	家族が揃った中で食べさせる	その他	気をつけていることは特にない	不詳	合計
知性×調整	9,115 ③ 82.6	2,195 ④ 19.9	3,266 ① 29.6	1,658 ④ 15.0	4,780 ④ 43.3	6,399 ③ 58.0	987 ② 8.9	5,161 ① 46.7	641 ④ 5.8	222 ② 2.0	197 1.8	11,041 100.0
知性×積極	7,670 ④ 81.6	1,878 ③ 20.0	2,622 ③ 27.9	1,455 ① 15.5	4,498 ③ 47.9	5,443 ④ 57.9	848 ① 9.0	4,177 ③ 44.4	736 ② 7.8	191 ① 2.0	204 2.2	9,398 100.0
感性×積極	8,909 ① 84.8	2,165 ① 20.6	2,874 ④ 27.3	1,627 ② 15.5	5,382 ① 51.2	6,244 ① 59.4	866 ③ 8.2	4,561 ④ 43.4	862 ① 8.2	170 ④ 1.6	187 1.8	10,511 100.0
感性×調整	8,976 ② 83.8	2,205 ② 20.6	3,146 ② 29.4	1,627 ③ 15.2	5,271 ② 49.2	6,323 ② 59.0	847 ④ 7.9	4,879 ② 45.5	802 ③ 7.5	177 ③ 1.7	176 1.6	10,712 100.0
合計	34,670 83.2	8,443 20.3	11,908 28.6	6,367 15.3	19,931 47.8	24,409 58.6	3,548 8.5	18,778 45.1	3,041 7.3	760 1.8	764 1.8	41,662 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.4 おやつについて家庭で気をつけていること

第3回調査問6の「おやつについて家庭で気をつけていることはありますか」の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表4である。

ここでも、気をつけていることが最も多いのは「感性×積極」グループであり、少ないのは「知性×調整」グループという傾向が確認される。唯一「時間を決めている」のみが逆転している。先述の食事の項目と一致しているわけではなく、理由はわからない。「知性×積極」は、「手作りのものになっている」の選択率が高い。全体としては、積極志向の子ども観を持つほうが、おやつに関しては気をつけていると言える。

表4 子ども観とおやつについて家庭で気をつけていること

	時間を決めている	甘いものは少なくするようにしている	栄養に注意している	手作りのものになっている	その他	特に気をつけていることはない	不詳	合計
知性×調整	4,251 ① 37.4	4,033 ④ 35.4	1,196 ④ 10.5	459 ④ 4.0	767 ④ 6.7	3,707 ① 32.6	69 0.6	11,377 100.0
知性×積極	3,527 ③ 36.4	3,613 ③ 37.3	1,175 ② 12.1	534 ① 5.5	847 ② 8.7	2,950 ② 30.5	90 0.9	9,681 100.0
感性×積極	3,896 ④ 36.1	4,170 ① 38.7	1,392 ① 12.9	568 ② 5.3	1,006 ① 9.3	3,143 ④ 29.1	85 0.8	10,789 100.0
感性×調整	4,092 ② 37.3	4,100 ② 37.4	1,291 ③ 11.8	495 ③ 4.5	880 ③ 8.0	3,329 ③ 30.4	76 0.7	10,962 100.0
合計	15,766 36.8	15,916 37.2	5,054 11.8	2,056 4.8	3,500 8.2	13,129 30.7	320 0.7	42,809 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.5 健康に関することで意識して行っていること

第4回問13「健康に関することでどのようなことを意識して行っていますか」の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表5である。

一般的に選択率が高いのは、「感性×積極」「感性×調整」の「感性」派である。「感性×積極」は、「歯の仕上げ磨きをする」「たばこの煙を吸わせないようにする」という親の自覚的な関与が必要な項目や、「早寝早起きをさせる」「なるべく外で遊ばせる」「体をよく動かす遊びをさせる」「その他」と健康で元気な子どもへの志向を示す項目で選択率が高い。

「感性×調整」は、「外から帰ったら手洗いをさせる」「早寝早起きをさせる」「たばこの煙を吸わせないようにする」「室内を清潔に保つ」で選択率が高く、衛生面への関心が高いと考えられる。「知性×積極」は「外から帰ったらうがいをさせる」「外から帰ったら手洗いをさせる」「歯の仕上げ磨きをする」という衛生面への関心は他に比べて低く、「体をよく動かす遊びをさせる」を重視している。「知性×調整」は、「外から帰ったらうがいをさせる」のみ高く、「感性×積極」で高かった諸項目は逆に低い。

幅広く気を配る「感性×積極」、衛生面重視の「感性×調整」、元気な子ども志向の「知性×積極」とまとめられよう。

表5 子ども観と健康に関することで意識して行っていること

	厚着をさせない	食事の前の手洗いをさせる	外から帰ったら手洗いをさせる	外から帰ったらうがいをさせる	歯の仕上げ磨きをする	早寝早起きをさせる	たばこの煙を吸わせないようにする	なるべく外で遊ばせる
知性×調整	2,731 ③ 25.4	3,638 ② 33.8	8,500 ③ 79.0	4,773 ① 44.3	8,225 ④ 76.4	4,497 ③ 41.8	2,823 ④ 26.2	3,082 ④ 28.6
知性×積極	2,421 ① 26.5	3,149 ① 34.4	7,153 ④ 78.2	3,797 ④ 41.5	7,093 ③ 77.5	3,959 ② 43.3	2,589 ③ 28.3	3,032 ② 33.1
感性×積極	2,647 ② 25.9	3,452 ③ 33.7	8,188 ② 80.0	4,313 ③ 42.1	8,214 ② 80.3	4,513 ① 44.1	3,150 ① 30.8	3,677 ① 35.9
感性×調整	2,651 ④ 25.3	3,494 ④ 33.4	8,486 ① 81.1	4,553 ② 43.5	8,423 ① 80.5	4,353 ④ 41.6	3,147 ② 30.1	3,429 ③ 32.8
合計	10,450 25.7	13,733 33.8	32,327 79.6	17,436 42.9	31,955 78.7	17,322 42.6	11,709 28.8	13,220 32.5

(つづき)

	体をよく動かす遊びをさせる	室内を清潔に保つ	その他	特に意識して行っていることはない	不詳	合計
知性×調整	2,879 ④ 26.7	4,363 ③ 40.5	385 ④ 3.6	363 ① 3.4	29 0.3	10,764 100.0
知性×積極	2,792 ② 30.5	3,698 ④ 40.4	458 ② 5.0	279 ② 3.0	33 0.4	9,151 100.0
感性×積極	3,242 ① 31.7	4,193 ② 41.0	525 ① 5.1	230 ④ 2.2	19 0.2	10,234 100.0
感性×調整	2,991 ③ 28.6	4,465 ① 42.7	426 ③ 4.1	262 ③ 2.5	12 0.1	10,466 100.0
合計	11,904 29.3	16,719 41.2	1,794 4.4	1,134 2.8	93 0.2	40,615 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とし

## 2.6 遊びについて意識していること

第5回調査問4「遊びについて意識していることはありますか」の回答傾向を子ども親の4分類ごとに見たのが表6である。

「感性×積極」が「子ども同士で遊ばせること」以外のすべての項目で1位であり、選択率が明らかに高い。「知性×調整」は、すべての項目で最も選択率が低くなっている。それ以外に関しては、健康、衛生、自然志向の「感性×調整」、体力重視の「知性×積極」という傾向が見られるが、残差の絶対値が1.97を超えるような明らかな差異は見られない。

表6 子ども親と遊びについて意識していること

	屋外で遊ばせること	体を動かす遊びをさせること	いろいろな遊びをさせること	好きな遊びをさせること	子ども同士で遊ばせること	家族で遊ぶこと	その他	意識していることは特 にない	不詳	合計
知性×調整	4,516 ④ 43.5	4,392 ④ 42.3	4,478 ④ 43.1	3,842 ④ 37.0	5,254 ④ 50.6	2,904 ④ 27.9	315 ④ 3.0	2,065 ① 19.9	21 0.2	10,392 100.0
知性×積極	4,117 ③ 46.5	4,040 ② 45.7	3,926 ② 44.4	3,335 ③ 37.7	4,572 ③ 51.7	2,520 ③ 28.5	337 ② 3.8	1,528 ③ 17.3	23 0.3	8,846 100.0
感性×積極	4,886 ① 49.3	4,642 ① 46.9	4,482 ① 45.2	3,915 ① 39.5	5,157 ② 52.0	3,025 ① 30.5	422 ① 4.3	1,552 ④ 15.7	20 0.2	9,908 100.0
感性×調整	4,722 ② 46.9	4,503 ③ 44.7	4,384 ③ 43.6	3,839 ② 38.1	5,274 ① 52.4	3,017 ② 30.0	345 ③ 3.4	1,798 ② 17.9	20 0.2	10,066 100.0
合計	18,241 46.5	17,577 44.8	17,270 44.0	14,931 38.1	20,257 51.7	11,466 29.2	1,419 3.6	6,943 17.7	84 0.2	39,212 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.7 食事時に特に気をつけていること

第6回調査問10「食事時に、特に気をつけていることは何ですか」の回答傾向を子ども親の4分類ごとに見たのが表7である。この設問は、先に見た第2回問4の「食事で気をつけていること」とは異なり、いわゆる食事に関するしつけに関する設問である。

今まで見た育児方針の各項目とは様子が異なっており、「感性×積極」グループの選択率は全体的に低めである。全体的には、「感性×調整」「知性×調整」の「調整」派の方が選択率が高く、食事のしつけにはより熱心であると言える。「あいさつする」「食べ物を粗末にしない」「遊びながら食べない」「残さず食べる」「食事中に席を立たない」などの基本的な食事のしつけは「感性×調整」が1位であり、「食べているときの姿勢」「お茶碗の持ち方」といったより外面的な部分のしつけは「知性×調整」が1位である。「テレビをつけない」は「感性×積極」の選択率が高い。

外見的なしつけほど「知性×調整」、全般的には「感性×調整」がしつけに熱心と言える。



表7 子ども観×食事時に特に気をつけていること

	あいさつする「いただきます」「ごちそうさま」	食べているときの姿勢	お茶碗やはしの持ち方	食べ物を粗末にしない	遊びながら食べない	残さず食べる	食事中に席を立たない	テレビをつけない	合計
知性×調整	7,410 ② 74.1	6,646 ① 66.4	5,191 ① 51.9	6,489 ② 64.9	7,718 ② 77.1	5,591 ② 55.9	5,787 ③ 57.8	2,670 ④ 26.7	10,005 100.0
知性×積極	5,987 ④ 70.5	5,502 ③ 64.8	4,346 ② 51.2	5,254 ④ 61.8	6,428 ④ 75.7	4,580 ③ 53.9	4,946 ② 58.2	2,543 ② 29.9	8,496 100.0
感性×積極	6,841 ③ 71.5	6,149 ④ 64.3	4,583 ④ 47.9	6,129 ③ 64.1	7,272 ③ 76.0	5,136 ④ 53.7	5,522 ④ 57.7	3,068 ① 32.1	9,568 100.0
感性×調整	7,293 ① 74.7	6,397 ② 65.5	4,857 ③ 49.7	6,729 ① 68.9	7,585 ① 77.7	5,491 ① 56.2	5,788 ① 59.3	2,799 ③ 28.7	9,765 100.0
合計	27,531 72.8	24,694 65.3	18,977 50.2	24,601 65.0	29,003 76.7	20,798 55.0	22,043 58.3	11,080 29.3	37,834 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

## 2.8 小括

以上の分析からは、ある程度一貫した傾向が読み解けよう。育児方針——子育てで意識して行っていること、気をつけていること——において、子どもに対する配慮が手薄なのが「知性×調整」グループである。しかし、このグループは、食事の際のしつけなど、より「伝統的」<sup>3</sup>な項目では選択率が高くなっている。「知性×積極」グループは、いろいろな配慮をし、子どもにはよく体を動かすことを望んでいる。「感性×調整」グループは、衛生面や健康面に配慮し、家族とのコミュニケーションを重視している。この2つの傾向を併せ持ち、子どもに対して特に配慮をしているのは「感性×積極」グループである。上記の「伝統的」な項目を除いたほとんどすべての項目で、高い選択率を示している。また、このグループは「好きな遊びをさせる」「子どもが好きなものを食べさせる」<sup>4</sup>といった子どもの自発的な嗜好を優先する志向性も強い。

これらの結果は、冒頭にあげた、厳格主義、業績主義、児童中心主義、童心主義という既存の子ども観研究にひきつけた各グループの解釈を支持していよう。ついで、お手伝いさせていることとさせている習い事から、教育行動について考える。

## 3. 子ども観と教育行動

### 3.1 お手伝いをさせていること

第6回問11では、「平成13年1月/7月生まれのお子さんに、次のようなお手伝いをさせていますか」と、お手伝いについて尋ねている。その傾向を子ども観ごとに示したのが、表8である。

<sup>3</sup> ここでの「伝統」には鍵括弧がつく。子どもやマナーに関する「伝統」自体が、近代的なものだからである。

<sup>4</sup> 者は残差1.97未満である。

表8 子ども観とお手伝いさせていること

	掃除	新聞や手紙などを取ってくる	買い物の荷物を持つ	洗濯物をたたむ	食卓に食器を並べ片づける	動物や植物の世話をする	弟や妹の面倒を見る	おつかい	合計
知性×調整	4,020	3,492	4,743	4,300	7,609	2,535	3,345	768	9,724
②	41.3	① 35.9	② 48.8	① 44.2	① 78.2	④ 26.1	④ 34.4	④ 7.9	100.0
知性×積極	3,341	2,945	3,998	3,568	6,197	2,272	2,876	676	8,220
④	40.6	② 35.8	③ 48.6	③ 43.4	④ 75.4	③ 27.6	③ 35.0	③ 8.2	100.0
感性×積極	3,858	3,168	4,493	3,861	7,006	2,773	3,637	772	9,288
①	41.5	④ 34.1	④ 48.4	④ 41.6	③ 75.4	① 29.9	② 39.2	② 8.3	100.0
感性×調整	3,906	3,317	4,708	4,167	7,341	2,781	3,752	793	9,486
③	41.2	③ 35.0	① 49.6	② 43.9	② 77.4	② 29.3	① 39.6	① 8.4	100.0
合計	15,125	12,922	17,942	15,896	28,153	10,361	13,610	3,009	36,718
	41.2	35.2	48.9	43.3	76.7	28.2	37.1	8.2	100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

買い物の荷物を持つ」「洗濯物をたたむ」「食卓に食器を並べ片づける」は、「知性×調整」「感性×調整」の「調整」派の選択率が高く、「動物や植物の世話をする」「弟や妹の面倒を見る」「おつかい」は「感性×積極」「感性×調整」の「感性」派の選択率が高い。「新聞や手紙などをとってくる」は、「知性」派の選択率が高い。

いわゆる家事の手伝いは、「知性×調整」を中心とした「調整」派、世話や面倒といったコミュニケーションや情緒に結びつくお手伝いは「感性」派と言ったところだろうか。

### 3.2 習い事

第3回調査から第6回調査には、「平成13年1月/7月生まれのお子さんは現在、習い事をしていますか」という設問がある。習い事をしているケースの各回のケース全体に対する比率の子ども観の分類ごとの変化を、習い事の項目ごとに見たのが図2～図12である。調査回によって傾向が逆転することもあるが、概ね、一貫した傾向が見られる。

- ・ 幼児教室(図2):「知識×積極」が多く、「感性×積極」がそれに次ぐ。「知性×調整」はそれほど熱心ではない。
- ・ 入園・入学のための学習塾(図3):「知識×積極」が他のグループより多い。
- ・ そろばん(図4):第6回で、「知識×積極」が多く、「知識×調整」がそれに次ぐという傾向が現れる。
- ・ 習字(図5):「感性×積極」が他のグループより少ない。
- ・ 音楽(ピアノなど)(図6):「感性×積極」が多く、「知識×積極」がそれに次ぐ。「知性×調整」は少ない。
- ・ 絵・工作(図7):「知識×調整」は常に少ない。第1回のみ「感性×積極」が高い。第5,6回では、「知識×積極」が多く、「知性×調整」に加え、「感性×調整」も少ない。
- ・ 体操(図8):「感性×積極」が多く、「知性×積極」がそれに次ぐ。「知性×調整」は第

5 階を除いて、「感性×調整」は第 1 回を除いて低く、積極派>調整派の傾向が見られる。

- ・ バレエ (図 9) : 第 5 回より「感性×積極」が多く、「知性×調整」が少ない。
- ・ 水泳 (図 10) : 「感性×積極」および「知性×積極」の「積極」派が多い。「知性×調整」は少ない。
- ・ 英語 (図 11) : 「知性×積極」、「感性×積極」が多く、「知性×調整」は少ない。
- ・ その他 (図 12) : 「感性×積極」が多く、「知性×調整」が少ない。

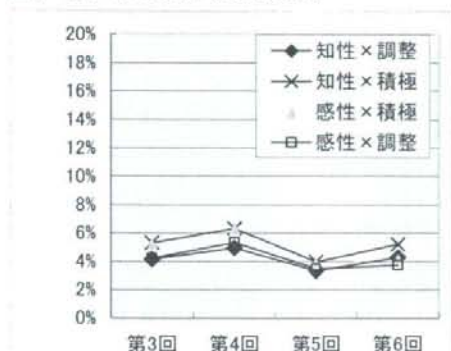
以上からは、全的な傾向としては、「感性×積極」、「知性×積極」の「積極」派がより熱心に習い事をさせていることがわかる。最も習い事をさせていないのが「知識×調整」となる。

「知識×積極」がより多いのは、「幼児教室」「入園・入学のための学習塾」「そろばん」「絵・工作」「英語」といった主に知育に関わるものであり、「感性×積極」がより多いのは、「音楽」「バレエ」「その他」などの情操教育に関する項目である<sup>5</sup>。また、「体操」「水泳」は「知識×積極」「感性×積極」のどちらがより多いか判断しがたい。さらに、「習字」と「そろばん」といういわゆる古いタイプの習い事に関しては、「感性×積極」は熱心でない。

---

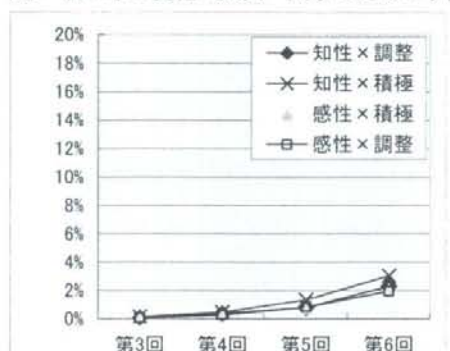
<sup>5</sup> この差異には、「知性」型に男児が多く「感性」型に女児が多いというジェンダーの要因が関係している可能性がある。なお、第 7 回以降は、野球やサッカーといった、現代的な男の子の習い事の項目が加わっている。

図2 習い事の変化（幼児教室）



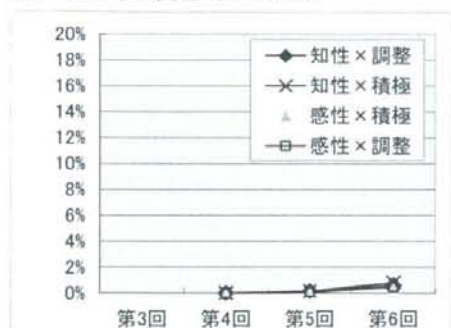
知性・調整	4.2%	5.0%	3.4%	4.3%
知性・積極	5.3%	6.3%	4.0%	5.2%
感性・積極	5.2%	6.3%	3.9%	4.1%
感性・調整	4.2%	5.4%	3.5%	3.8%

図3 習い事の変化（入園・入学のための学習）



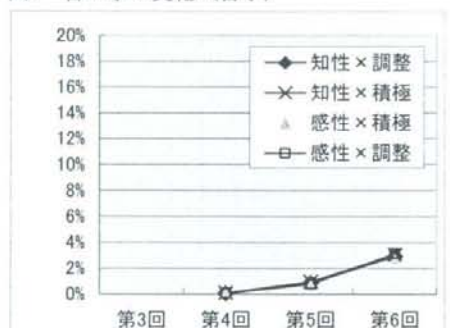
知性・調整	0.1%	0.4%	0.8%	2.3%
知性・積極	0.2%	0.5%	1.4%	3.1%
感性・積極	0.1%	0.3%	0.7%	2.1%
感性・調整	0.1%	0.3%	0.9%	2.0%

図4 習い事の変化（そろばん）



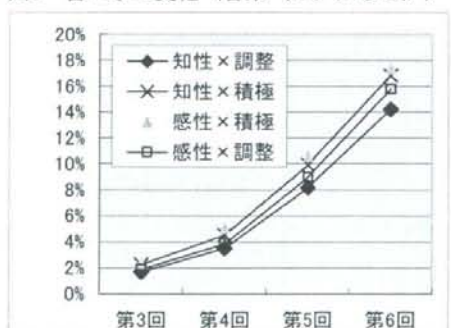
知性・調整	0.0%	0.2%	0.6%	
知性・積極	0.0%	0.2%	0.8%	
感性・積極	0.0%	0.1%	0.4%	
感性・調整	0.0%	0.1%	0.5%	

図5 習い事の変化（習字）



知性・調整	0.1%	0.9%	2.9%	
知性・積極	0.1%	1.0%	3.1%	
感性・積極	0.1%	0.7%	2.7%	
感性・調整	0.1%	0.8%	3.1%	

図6 習い事の変化（音楽（ピアノなど））



知性・調整	1.7%	3.5%	8.2%	14.2%
知性・積極	2.3%	4.5%	10.0%	16.8%
感性・積極	2.4%	5.0%	10.6%	17.3%
感性・調整	1.9%	3.9%	9.0%	15.8%

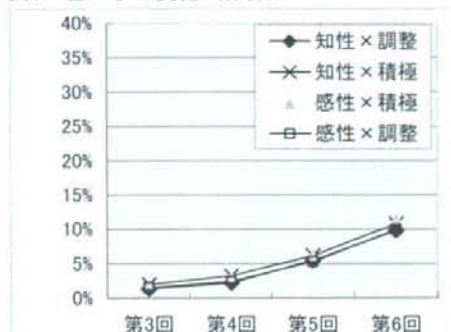
図7 習い事の変化（絵・工作）



知性・調整	0.0%	0.3%	0.9%	1.7%
知性・積極	0.1%	0.4%	1.5%	2.7%
感性・積極	0.1%	0.3%	1.3%	2.3%
感性・調整	0.1%	0.2%	0.8%	1.8%

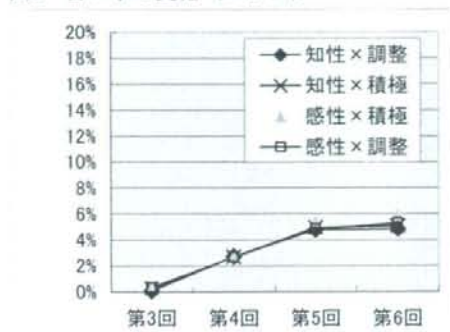
※ 図2～7すべてにおいて、クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

図8 習い事の変化（体操）



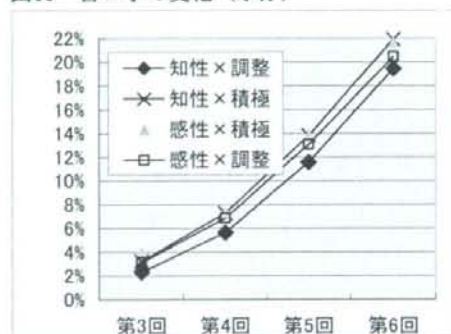
知性・調整	1.4%	2.2%	5.5%	9.8%
知性・積極	2.0%	3.2%	6.2%	10.8%
感性・積極	2.1%	3.1%	6.2%	11.4%
感性・調整	1.5%	2.4%	5.3%	10.0%

図9 習い事の変化（バレエ）



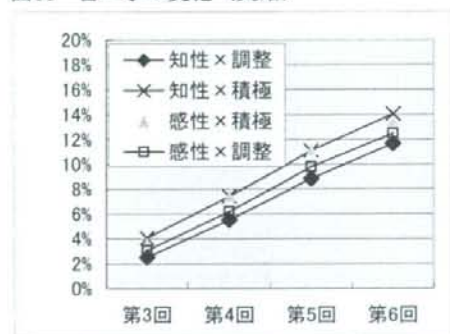
知性・調整	0.1%	2.7%	4.8%	4.9%
知性・積極	0.3%	2.7%	5.0%	5.1%
感性・積極	0.3%	2.7%	5.5%	5.9%
感性・調整	0.3%	2.7%	4.8%	5.3%

図10 習い事の変化（水泳）



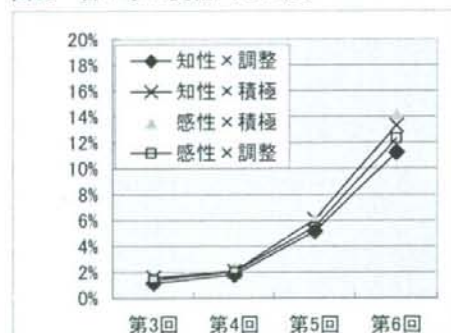
知性・調整	2.3%	5.7%	11.6%	19.5%
知性・積極	3.2%	7.3%	13.8%	21.9%
感性・積極	4.0%	7.3%	13.9%	21.6%
感性・調整	3.1%	6.9%	13.1%	20.5%

図11 習い事の変化（英語）



知性・調整	2.5%	5.6%	8.8%	11.7%
知性・積極	4.1%	7.4%	11.1%	14.1%
感性・積極	3.7%	7.4%	11.1%	13.4%
感性・調整	3.1%	6.2%	9.8%	12.5%

図12 習い事の変化（その他）



知性・調整	1.2%	1.8%	5.2%	11.3%
知性・積極	1.6%	2.1%	6.1%	13.3%
感性・積極	1.7%	2.4%	6.1%	14.2%
感性・調整	1.4%	2.1%	5.5%	12.3%

※ 図8～12すべてにおいて、クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

### 3.3 小括

お手伝いと習い事から、子ども観ごとの教育行動の違いを見ると、次のように言えるだろう。「知性×調整」は、いわゆる家事手伝いを重視し、習い事には、「そろばん」を除けば、他のグループに比べて積極的ではない。「知性×積極」は、お手伝いは他のグループに比べて熱心ではなく、知育系を中心に、習い事に比較的熱心である。「感性×積極」は、家事手伝いには比較的熱心ではないが、コミュニケーションや情緒に関するお手伝いは積極的にさせている。情操系の習い事を中心に、習い事にも比較的熱心である。「感性×調整」は、お手伝いはどのタイプのものも比較的させている。習い事は、「知性×調整」グループよりはやらせている。

これらの結果は、2同様、冒頭あげた、厳格主義、業績主義、児童中心主義、童心主義という既存の子ども観研究にひきつけた各グループの解釈を支持している。別の言い方をすれば、子ども観の各グループは、積極／調整、知性／感性という子ども観の分類の際に名づけた軸の名前を見事に反映したような、育児方針と教育行動をとっているのである。もちろん、全体的な回答傾向はグループごとに大きな差異はなく、このような傾向は、わずかな選択率の高低の違いとして現れているにすぎないことにも注意が必要である。しかし、同時に、子どもに対するまなざしが実際の子育てにおける意識や行動の差異と関連しているということを、実際のデータから確認できたということは、やはり重要である。

## 4. 今後の課題

今回分析したのは、分析すべき項目の未だ一部にすぎない。TV視聴のあり方や睡眠時間（時刻）などの基本的な生活習慣に関するしつけの方針や実態を子ども観との関係で見ていることもできよう。また、父母が子どもと一緒に過ごす時間など、より直接的な父母の子どもへの接し方に関する項目も検討が必要である。

しかし、それ以上に重要なのは、繰り返すように、対象となる子どもが小学校に入学する第7回調査以降の教育行動の分析である。乳幼児期への子どもへの様々な配慮のあり方の分析と併せて、学習・教育といった局面でどのような子ども観を持った家族がどのような行動をとっているのかを見ていくことが、『出生児縦断調査』を子ども観の分析の素材としていく際の重要なポイントとなるだろう。

加えて、近代家族の子ども観の研究においては、「教育家族」に代表されるような子どもに対して高度な配慮をする子育てのあり方が、育児不安や負担感につながっているという指摘や、少なく産んでしっかり育てる少産化傾向につながっているという指摘もある（沢山1987など）。『出生児縦断調査』では、毎年「平成13年1月／7月生まれのお子さんを育ててよかったこと」と「負担に思うこと」を尋ねている。子ども観とこれらの育児に関する意識の関係なども見ていくことも重要な課題である。

なお、ここで「子ども観」と述べてきたのは、回答者である父母らが抽象的に抱いてい

るものではないということにも注意が必要である。回答は、あくまでも「平成 13 年 1 月 / 7 月生まれのお子さんはどのような子に育てて欲しいと思いますか」という設問に対する解答であり、対象となる子どもの個性に関わらず一貫した子ども像を回答したケースもあれば、その子どもの特性を考慮した回答をしたケースもありうる。第 4 回には、子ども自身の性格を尋ねており（問 11 「平成 13 年 1 月 / 7 月生まれのお子さんは現在どのような性格だと思いますか」）、それと子ども親の関係を見ていくこと——性格に沿った子ども像を期待しているのか、性格とは逆の子ども像を期待しているのか、実際の子どもの性格とは比較的独立した理想としての子ども像を答えているのか——なども必要であろう。このような点を整備していけば、親の教育戦略が、子どもの行動や能力によって変化していく様も見ていくことができるかもしれない。

## 文献

Aries, Philippe 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime*, Editions du Seuil, (=1980 杉山光信・杉山恵美子訳『<子供>の誕生』みすず書房)。

Dewey, John [1899]1990 "The School and the Society" *The School and the Society and the Child and the Curriculum*, University of Chicago Press, (=1998 市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社)。

広田照幸 1999 『日本人のしつけは衰退したか：「教育する家族」のゆくえ』講談社。

元森絵里子 2008 「出生児縦断調査」による子ども親の分析に向けて——「どのような子に育てて欲しいか」の分類および規定要因分析——『パネル調査（縦断調査）に関する総合的分析システムの開発研究』（平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金統計情報総合研究事業報告書）。

沢山美果子 1987 「〈童心〉主義子ども親の展開：都市中間層における教育家族の誕生」『保育幼児教育体系 5 保育の思想』労働旬報社

沢山美果子 1990 「教育家族の成立」中内敏夫他『教育：誕生と終焉』藤原書店。

## 1 2 わが国における配偶者選択選好の変化：2002 年以降の結婚行動にみられる新たな知見

福田節也

### 1. はじめに

前年度のプロジェクトにおいては、イベントヒストリー分析 (event-history analysis) の拡張モデルである離散時間ネステッド・ロジット・モデル (discrete-time nested logit model) (山口 2002a,b)<sup>1</sup>を用いて、脱落による影響を加味した初婚要因の分析を行った (福田 2008)。分析の結果、1) 初婚と脱落の生起過程には非常に強い正の相関があること、2) この相関を無視して、脱落をセンサリング (censoring) として扱う通常のイベントヒストリー分析を行うと、パラメーターの推定に重大なバイアスが生じることが明らかとなった。初婚と脱落の生起過程に強い相関が認められるのは、パネル調査における脱落が時として結婚を契機に発生しているためである。このような場合、センサリングが分析対象とするイベントの生起とは独立に生じる、というランダム・センサリング (random censoring) の仮定を満たすことができず、パラメーターの推定に重大なバイアスを生じる。「21 世紀成年人者縦断調査」においては、毎年 10-15% と無視できない割合で脱落が発生している。分析に際しては、対象とするイベントと脱落との関係を見極めたくて、より応用的な手法を用いる必要があることが示された。

さて、前年度の報告論文 (福田 2008) では、上記のような方法論的な知見に加えて、わが国の結婚行動をめぐる興味深い知見も得られた。例えば、高学歴であるほど、フルタイム就業であるほど、そして高収入であるほど、女性の結婚が促進されるという知見がその一例である。1990 年代までのデータを用いた先行研究 (Tsuya and Mason 1995, Ono 2003, Raymo 2003, 福田 2007b) においては、高学歴や高収入といった要因は、女性の結婚を遅らせる要因として示されてきた。また、これらの結果は、女性の経済的自立が結婚による効用の低下や、出産による機会費用の上昇をもたらし、非婚化を推進しているという Becker (1981) をはじめとする新家政学派の議論と一致するものとして解釈されてきた。しかし、前年度の拙稿において示された結果は、これらの先行研究とは異なるものである。このことは 2000 年以降に入り、女性の経済的自立とわが国の結婚行動との関係が変化しつつあることを示唆しているのであろうか。

アメリカや北欧諸国などのように、男女の役割分業が比較的平等的である国々においては、女性の潜在的稼得能力 (earnings potential) は結婚を促す作用を持つのに対し、イタリ

<sup>1</sup> 別名、SURF (Shared Unmeasured Risk Factor) Model ともいう。Hill et. al. (1993)によって最初に開発された。



アや日本のようにこれが固定的な国々においては、女性の潜在的稼働能力は結婚形成に対して負の効果を持つことが示されてきた (Blossfeld 1995, Ono 2003, 福田 2007a,b)。前者の国々では、夫婦共働きの核家族が一般的であり、稼働能力の高い女性が結婚市場において選択されやすいのに対して、後者の国々では男性を稼働者とした (male bread-winner) 家族モデルが根強いこと、経済力の高い女性ほど、結婚によって得られる効用が低く、機会費用の上昇に直面しやすいことが、その理由として挙げられている (Blossfeld 1995, Oppenheimer 1997)。また、わが国においては女性の上方婚志向が根強いことから、学歴や経済力の高い女性ほど、自分より高い属性を持ち合わせた男性に巡り合うことが困難となることも指摘されている (山田 1996 Raymo and Iwasawa 2005)。

上記の知見は、個人が自己に内面化している「あるべき家族像」の相違によって、女性の経済力と結婚タイミングとの関係が規定されていることを示唆している。そのため、前年度の報告論文 (福田 2008) によって示された、高学歴、高収入の女性ほど結婚しやすいという結果は、若者の結婚に対する考え方や理想とする家族生活が従来とは変化していることを意味しているのではないかと推察される。女性の潜在的稼働能力と結婚形成との関係を探ることは、結婚市場における選好の変化、ひいては近年のコホートにおける家族モデルが、専業主婦家庭から共働き家庭へと変化していくのか否かを占う上で重要な意味をもつ。また、近年盛んに議論されているワークライフ・バランスの政策的推進についても、家庭における夫婦の役割分担のあり方がその要となること指摘されている (山口 2005)。そのため、近年のコホートにおける女性の経済的地位と結婚行動の関係を探ることは、若者の家族 (夫婦) 生活に対する志向が、ワークライフ・バランス社会と合致した方向に進みつつあるのかを検証することにも繋がる。

以上を踏まえ、今年度のプロジェクトにおいては、第 5 年度分の新たなデータを追加して、前回行った初婚要因分析の再検証を行う。具体的には、1) 学歴や所得といった要因が近年における女性の結婚形成にどのような影響を与えているのか、また、2) 学歴が女性の結婚形成に与える影響は、本人の性別役割分業に対する考え方によってどのように媒介されるのか、について検討する。

## 2. 研究の背景

結婚に関する社会学、経済学の理論は、いずれも結婚生活における「特化と交換」 (specialization and exchange) がその中心概念を成している (e.g. Becker 1981, Persons 1949)。Becker (1981) による結婚の理論においては、結婚による効用は夫妻のそれぞれが家計内活動 (家事や育児など) と家計外活動 (市場における労働) に特化し、それぞれの活動から得られる財やサービスを共有することによって最大化されると説いている。近代社会においては、典型的に男性は女性よりも労働市場において比較優位であり、女性は男性よりも家庭内労働において比較優位である。そのため、結婚における利得は、男性が家計外活動

に特化し、女性が家計内活動に特化する場合に最大となる。近年における女性の高学歴化やキャリア志向化は、女性の経済的自立を促し、このような「特化と交換」に基づく結婚への魅力を減じる要因となる。Becker (1981) は、女性の経済的自立こそが、近年の先進諸国における晩婚・未婚化の最大の要因であると論じた。この仮説は、「女性の経済的自立仮説」といわれる。

「女性の経済的自立仮説」は、その登場以来、先進国の結婚・家族形成を説明する理論として盛んに用いられてきた。しかし、西欧諸国を対象とした近年の結婚研究においては、その妥当性に大きな疑問が呈されている。それらの結婚研究では、調査個票データを用いて、女性の教育水準や就業、賃金といった潜在的稼得能力と結婚の発生確率との関係を直接的に分析・検証されている。その結果、女性の潜在的稼得能力と結婚の発生確率との関係は、統計的に無関係、もしくは理論的想定とは逆の正の関係（稼得能力が高い女性ほど結婚しやすい）を示すことが明らかとなっている（詳細については、Oppenheimer 1997 を参照）。

しかし、結婚の発生確率に関する国際比較研究においては、女性の経済的地位と結婚タイミングとの関係が、社会における性別役割分業を巡る状況によって異なることが示されている（Blossfeld 1995, Ono 2003, 福田 2007a, 2007b）。これらの国際比較研究においては、性別役割分業の度合いが低い国（北欧諸国やアメリカなど）においては、女性の稼得能力は結婚と正の関係をもち、これが低い国（日本やイタリアなど）においては負の関係を示している。家庭生活における伝統的な性別役割分業は、Becker の結婚理論の前提をなしている。したがって、「女性の経済的自立仮説」の妥当性は、対象とする社会において、伝統的な性別役割分業に基づく家族がどの程度一般的に普及しているのかに依存するといえる。

わが国は近年においても伝統的な性別役割分業に基づく家族形態が根強く、「女性の経済的自立仮説」が支持される数少ない先進国の 1 つである。先行研究においては、女性の学歴（Raymo 2003, Raymo and Iwasawa 2005）や年収（Ono 2003, 福田 2007a 2007b）は結婚形成に対して負の影響を与えていることが示されている。

さらに、Raymo と Iwasawa (2005) によるわが国の結婚市場（marriage market）の分析においては、女性の高い稼得能力のみならず、女性の上方婚志向もまた、この負の関係を説明する重要な要因であることが示唆されている。かれらの研究においては、1980 年から 1995 年までの期間を対象として、女性の教育水準の構成変化が、女性の教育水準別年齢別結婚確率に与えた影響について検証している。その結果、大卒女性の結婚確率の低下のうち約 25% は、大卒女性に見合う魅力を兼ね備えた未婚男性の不足によって生じていることが示されている。つまり、女性の高学歴化が急激に進んでいるにもかかわらず、女性の上方婚志向が不変である。そのため、高学歴女性と同等かそれ以上の学歴や稼得能力をもつ男性の供給が相対的に不足しており、高学歴女性に結婚難をもたらしている。Raymo と Iwasawa (2005) は、この説明を「結婚市場におけるミスマッチ仮説」と名付け、わが国における未婚化を説明する重要な仮説として位置づけている。また、かれらの分析によれば、観察

期間中に上述のような教育水準の構成変化がなかったと仮定しても、大卒女性は高卒女性よりも未婚である確率が顕著に高いことが示されている。このことは、潜在的稼得能力の高い女性ほど結婚しない傾向が強まっていることを意味しており、「女性の経済的自立仮説」の成立を同時に支持するものでもある (Raymo and Iwasawa 2005)。したがって、わが国における女性の学歴と結婚形成との間に認められる負の関係は、高学歴化による女性の経済的自立と結婚市場におけるミスマッチという 2 つの要因がともに作用していることが示唆されている。

Raymo と Iwasawa (2005) の研究における重要な知見は、高学歴女性における未婚化が、2 つの異なるタイプの女性において同時に進行しているという点にある。「女性の経済的自立仮説」と「結婚市場におけるミスマッチ仮説」の並立は、経済的自立を手にして男性との結婚を必要としない女性と、より稼得能力の高い男性と結婚し、その経済力に部分的にせよ全面的にせよ依存することを望む女性が、同じ大学卒というグループに存在していることを示唆している。前者の女性は伝統的な性別役割分業に基づく結婚形態を忌避することによって、後者の女性は逆にそれを望むことによって、それぞれが結婚難に直面しているのである (Raymo and Iwasawa 2005)。このような高学歴化による異なる未婚化プロセスについて、より明示的な分析を行うためには、学歴を潜在的稼得能力という一面によって捉えるのではなく、むしろ同一学歴内に存在する個人の異質性、とりわけ性別役割分業に対する価値観やキャリア志向といった個人の選好に関わる要因を考慮した上で、学歴と女性の結婚の関係について分析を行うことがより重要であるといえよう。

わが国の大学教育は、大衆化 (マス化) の過程を経ており、女性の大学進学率は近年において著しい上昇をみせている。男女ともに大学卒業者が、その数、割合ともに社会の主流占めるようになりつつあり、高学歴化と未婚化との関連を明らかにすることは、今まで以上に重要な課題となりつつある。また、このことは現在の結婚行動のみならず、わが国の将来の結婚動向を占う上でも重要な問題である。本研究においては、女性の学歴や賃金所得、ならびに性別役割分業に関する意識を結婚分析に反映させることにより、「女性の経済的自立仮説」と「結婚市場におけるミスマッチ仮説」の 2 つをより直接的に検証することを意図する。具体的には、第 1 に、女性の学歴と賃金所得が結婚形成に対してもつとされてきた負の効果が、2000 年以降の最近の結婚行動においても当てはまるのか否かを検証する。この分析を通して、「女性の経済的自立仮説」が近年の結婚行動に適合するのか否かを検証する。第 2 に、女性の性別役割分業に関する意識をモデルに追加し、結婚ハザードに対する影響を推定する。伝統的な性別役割分業意識が、結婚行動に正の効果をもつ場合は、わが国における結婚形態が伝統的な「特化と交換」に基づく結婚に依拠していることの証左となろう。また、学歴と結婚形成との関係が、性別役割分業に対する意識といった個人の選好を統制した上でどのように変化するのかを確認する。そして第 3 に、女性の性別役割分業に対する意識と学歴との交互作用効果を検証する。性別役割分業意識が現実の結婚行動に与える影響は、女性の学歴によって異なることが予測されるためである。ミス

マッチ仮説が支持されるのであれば、高学歴層において伝統的な性別役割分業意識は女性の結婚行動に対して負の効果をもつであろう。

実証分析に移る前に、本研究におけるいくつかの特徴について述べておきたい。第1に、本研究では女性の性別役割分業意識といった価値観変数を結婚行動の説明変数として用いる。また、従来より、学歴を潜在的稼得能力の代替変数として用いることには批判があった(e.g. Sørensen 1995)。そこで、本研究では年間勤労所得を統制した上で、学歴の影響を吟味する。年間勤労所得そのものも女性の稼得能力を表していると考えられるため、従来の研究(Ono 2003, Higuchi 2001)にみられるように結婚形成に対して負の影響をもつのか、また年間勤労所得を統制した場合に学歴による影響には変化がみられるのかを検討する。最後に、本研究では、同じ学歴グループの女性に存在する異質性を性別役割分業意識によって分離することを試みる。大卒女性の中にも、経済的自立を達成することにより未婚化する女性と、従来型の上方婚を望むがゆえに未婚化する女性の2通りのケースがあることが示されており(Raymo and Iwasawa 2005)、性別役割分業意識のような選好要因が女性の学歴と結婚行動との関係にどのような影響を与えているのかを明らかにすることが重要な課題となっている。本研究はこのような要請に応えるものである。以上の特色は、いずれも同一の調査対象者を継続的に調査するパネルによってのみ可能であり、「21世紀成年者縦断調査」はわが国最大のサンプル規模をもつパネル調査であることから、もっとも安定した推定結果が得られることが期待される。

### 3. データと分析対象

分析には、厚生労働省が2002年11月より実施している「21世紀成年者縦断調査」(以後、成年者調査)の第1回から第5回(パネル1からパネル5)までの個票データを使用した。成年者調査は、男女の結婚、出産、就業等の実態及び意識の経年変化の状況を把握することを目的として実施されているパネル調査である。同調査は、全国より無作為に抽出された20-34歳(平成14年10月末日現在)の男女及びその配偶者35,448人を対象としており、第1回調査では対象サンプルの82.0%にあたる29,052人より回答を得ている。調査は毎年11月に行われており、前回調査の回答者を対象として継続的に回答を得ている。調査方法は調査員による留置き法を基本とし、第1回調査以降に転出した者に対しては郵送法が併用されている<sup>2</sup>。成年者調査はわが国における既存のパネル調査の中でも最大規模の調査の1つである。

<sup>2</sup> 留置き法では、調査員があらかじめ配布した調査票に被調査者が自ら記入し、密封したものを後日調査員が回収する留置き法によって回収されている。また、第1回調査以降に転出した者については、厚生労働省から郵送された調査票に被調査者が自ら記入し、郵送により厚生労働省に提出する方法を用いている(厚生労働省大臣官房統計情報部 2005)。